

Title	マルクス主義に謂ふ所の過渡期について
Author(s)	河上, 肇
Citation	経済論叢 (1921), 13(6): 932-939
Issue Date	1921-12-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/127846
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第

卷三十第

行發日一月二十年十正大

論叢

我所得稅と普遍の原則

法學博士 小川郷太郎

植民政策是非

文學博士 原勝郎

朝鮮の三開港場

文學博士 三浦周行

進歩か退歩か

法學博士 財部靜治

農業勞働問題

法學博士 河田嗣郎

時論

米國の排日問題

法學博士 末廣重雄

財産稅案^{に對する}諸種の非難^{に答ふ}

法學博士 神戸正雄

說苑

リッケルトの價值體系

文學博士 米田庄太郎

雜錄

マルクス主義に所謂過渡期

法學博士 河上肇

伯林最近の生活費

法學士 汐見三郎

附錄

本誌第十三卷總目錄

雜 錄

マルクス主義に謂ふ所の 過渡期について

河 上 肇

マルクス主義は共產主義の經濟組織を實現することを理想としてゐるものであるが、しかし其の理想とする經濟組織が一舉にして實現せられると信じてゐるものではない。其の點は、マルクスが一八七五年にブラツケに宛てた手紙を見ると善く分かる。——その手紙の全文は近頃堀利彦氏によつて邦譯され、『社會主義研究』の十月號に『ゴータ綱領の批評』と題して掲載されてゐる。又私は拙著『社會問題研究』第二十七冊に『マルクスが一八七五年に書いた手紙』といふ標題の一文を載せ、この手紙の内に現はれた大體の思想を紹介して置いた。——それによつて見ると、マルクスの考によれば、資本主義

から共產主義の完成に至るまでには、第一に資本主義から共產主義への過渡期があり、第二に共產主義の半成期（即ち社會主義の時期）があり、然る後第三に共產主義の完成期に入ると云ふのである。さうして此の中、第一の過渡期の狀態につき、マルクスの記述してゐる事柄は、大體二つある。その一は、政治上に於て無產者の執權が行はれると云ふことであり。その二は經濟上に於て資本家階級の私有に屬する資本が國有化され、生産方法の革命的變革が起ると云ふことである。しかし此等の點は、私の既に公にした一二の論文に略述して置いたことであるから、茲に繰り返さうとは思はない。只今述べて見たいと思ふのは、この過渡期の狀態につき、露國の現状から思ひ付いた一二の事柄である。

露國の現状はどうなつてゐるか、正確なことは今知るよしもない。しかしレーニンやトロツキーなどの書いたものを見ることによつて、吾々は露國共產主義者の現在の意識を知ることが

出来る。さうして其れによれば、今日の露西亞は、明かにマルクスの所謂『資本主義から共產主義への過渡期』に屬するものである。

蓋し露國の共產主義者が純粹のマルクス主義者であることは、言ふを俟つまい。勿論今日では、可なり色彩の違つた社會主義者が、互にマルクスを宗とする旨主張してゐる。けれども次のことだけは、露國共產主義者について確かである。即ち第一は、彼等自らが（他の人々は其れを如何に批評してゐるにしても）純粹のマルクス主義者を以て任じてゐること。第二に、彼等はマルクスの主なる思想に對し『修正』を加ふる必要を認めてゐないこと、是れである。殊に吾々が今問題としてゐる所の、共產主義實現の過程について、彼等が、嘗てマルクスが豫想したと、同じ豫想を抱いてゐると云ふことは、レーニンの『國家及び革命』の一著が、最も明白に證據立てゝゐる。

斯様な譯だから、露國の共產主義者は、今日の露國を以て、共產主義を實行してゐないのは

雜錄 マルクス主義に關ふ所の過渡期について

勿論、半共產主義（社會主義）をさへ未だ實行するに至らざるものと考へてゐる。本年七月發行の『ソビエト露西亞』に掲載されたレーニンの『農業税の意義』と題する論文（その抄譯は拙著『社會問題研究』第二十六冊に載す）を見ると、彼は其の中に次の如く述べてゐる。『露西亞の經濟を吟味しつゝある者は、——私は思ふ——只の一人でも、其の過渡的性質を否認する者はあるまい。『社會主義ソビエト共和國』といふ名前は、社會主義への推移を必ず實現するといふソビエットの決心を表はしてゐるだけで、それは、現在の經濟秩序が已に社會主義的といふべきものになつてゐると云ふことを、意味してゐるのでは決して無いと云ふこと、この事を否認せんとする者は、——私は思ふ——共產主義者の中に恐らく一人もあるまい』彼は又『物質的、經濟的、産業的の意味に於ては、吾々はまだ社會主義の玄關にも達してゐない』とも言つてゐる。

之で見ると、今日の露西亞がマルクスの所謂

『資本主義から社會主義への過渡期』に屬することは、略ぼ明白である。そこで今日の露西亞を以て所謂過渡期に在るものと前提し、その眼を以て之が現狀を考へて見ると、其處には、マルクスの豫言に記載されてゐなかつたやうな、二三の事實が生じてゐるやうに思ふ。勿論露西亞の『實驗』は、様々の新らしい事實を吾々に示して呉れるに相違ない。けれども其の總勘定を爲すべき日は、まだ先のことで、或は吾々の——私の——生存中には、遂に到來しないかも知れない。それで早計の嫌はあるが、差當り思ひ付いた二三の點を、述べて見やうと思ふのである。

マルクスがブラツケに宛てた手紙を見ると、過渡期を過ぎて共產主義の半成期に這入ると、社會の富の分配は、各人が社會のために提供する勞働の量と質とを標準として行はれることに爲るが、その完成期に這入ると、各人の要求又は欲望を標準として行はれることに爲る、と説明してある。しかし此等の時期に這入る前の所

謂過渡期には、如何なる標準によつて分配が行はれるか、その點については何等の説明がして無いやうだ。そこで今日の露西亞では如何なる分配法を採つてゐるか云ふことが、興味ある一つの問題になるのであるが、トロツキーの『勞働組織の諸問題』と題する論文(本年一月發行の『ソヴェット露西亞』第四卷第三號より第六號まで連載)を見ると、その中には次の如く述べてある。

『勞働に對する、賃銀は吾國に残存してゐる、さうして、恐らく引續き殘存するであらう。尤も長い間には、その重要さは、段々に、社會の總ての成員に彼等が要求する所の有らゆる物を供給するの必要に存することになり、さうして正に斯様にして、それは、勞働に對する賃銀たる性質を失ふに至るであらう。けれども現在では、吾々はさう云ふことを實行するまでに、十分に富んでゐない。吾々の主たる仕事は、生産される貨物の分量を高めるに在る。さうして他の總ての仕事は之に従たるも

のである。現在の如き困難な時期に在つては、労働に對する賃銀は、吾々にとつて、個々の労働者の生存を確保するための手段ではなくて、個々の労働者が其の労働によつて「労働者の共和國」のため如何ほどの貢獻をするかを記録するための手段である。

『だから労働に對する賃銀は、貨幣の形にしる實物の形にしる、出來得る限り正確に、個々の労働の生産力と一致せしめねばならぬ。……斯様にして他の者よりも、多く一般の福祉に貢獻する労働者は、怠け者や、やくざ者や、秩序紊亂者よりも、社會の生産物に對して、より多くの分前を得る權利を有する。』

過渡期に於ては、まだ階級の區別が在る。階級の區別が全く無くなれば、社會は始めて共產主義の第一期（社會主義時代）に這入り、始めて社會の成員總てが労働者になるのだが、まだ其の時代に進まぬ前の過渡期では、總ての人が労働者だと云ふ譯では無い。けれども労働者の賃銀に關する限りに於ては、共產主義の第一期

に行はるべき原則に據るの外は無い。この意味に於て、共產主義の第一期に行はるべき原則は、過渡期に反射してゐると云ふことも出來れば、共產主義の第一期の状態は一の萌芽として已に過渡期に於て發生すべきだと云ふことも出來る。吾々は労働者の賃銀に關する範圍に於て、トロツキーの論文から、是れだけのことを考へ得るが、更に其れ以上に出て、所謂國民所得が社會の全員に亘つて如何様に分配されるかを概括するためには、吾々の有する——私の知つてゐる——正確な資料が餘りに貧弱であり、且つ恐らく實際の状態も頗る混雜してゐるであらう。

次に國家權力の問題については、マルクスは明かに其の『死滅』を未來に望見してゐたものである。國家の權力は、共產主義がより完全に實現せらるゝ度合に従うて、次第に其の必要を失ふものだ云ふのが、マルクスの意見であつて、レーニンの『國家と革命』を見ても矢張り

同様の意見が祖述してある。勿論彼等は、資本

主義から共產主義に移る過渡期には『無産者の
執權』といふ實質を具へた國家の權力が、是非
必要だといふことを認めてゐるので、その點に
於て、彼等は無政府主義者と窮極の目的を一に
しながら、その過程と手段とに於て全く意見を
異にしてゐる。それだけの事は、先きに述べた

マルクスの手紙を見ても、善く分かる。しかし
兎も角、國家權力の死滅に近づくべき共產主義
を實現するための過渡期であるから、此の時期
の國家權力は、資本主義の時代ほど、強大なも
のでは無かるべき筈のものに思はれる。現にレ
ーニンの『國家と革命』を見ても、從來の社會
では少數の階級が多數の階級に壓服してゐたの
だから、壓服の機關たる國家の權力も頗る強大
なことを必要としたが、一旦過渡期に這入る
と、多數の無産者が少數の有産者を壓服するの
だから、それは比較的容易なことで、事件の進
行に伴ひ、壓服の機關たるべき國家の權力はさ
まで強大なことを必要としなくなる、と述べて

ゐる。

しかし革命以後今日に至るまでの露西亞の狀
態を見ると、國家の權力の壓力は可なりに強い
ものゝやうに思はれる。この點につき、トロツ
キーの前掲論文には、次のやうなことが記述し
てゐる。

『……社會主義の下に於ては、強制の機
關たる國家は、存在しなくなるであらう。それ
は生産及び消費の共同社會の内へ完全に吸収
されて仕舞ふであらう、けれども社會主義へ
の道は國家組織の強化といふ道を通る、さう
して今吾々は正に此の時期を通つてゐる。丁
度ランプが油が無くなつて消える前に、一度
燃え上がると同じやうに、國家は、それが消
え去る前に、無産者の執權といふ形、即ち各
方面に於て其の市民の生命を握る所の、最も
無情なる國家の形を取る。軍隊を除いたなら、
從來如何なる組織も、此の困難な過渡期に於
ける勞働階級の國民的組織ほど、峻烈な強制
を人の上に加へたものは有るまい。正に此の

理由によつて、吾々は勞働の軍隊化といふことを言ふ。』

之で見ると、過渡期の初期には、著しい國家權力の強化が行はれて、それは未曾有の峻烈な強制を國民の上に加ふるものだ、と云ふことが分かる。けれども其れは、油が無くなつて消える前のランプが燃え上がったのと同じことで、過渡期の進行に伴ひ、事態が稍々落付くにつれて、急に其の必要のないものとなり、かくて過渡期を過ぎて共產主義の第一期（その半成期——社會主義の時代）に這入ると、殆ど有るか無きかのものに爲つて仕舞ひ、更に共產主義の完成期に這入ると、全くその跡方も無いものに爲つて仕舞ふ。露國の共產主義者は斯様に考へてゐるやうに思ふ。だから之を過渡期の初期について言へば、彼等は最も極端な國家主義者だといふことが出来る。

最後に述べたいことは、過渡期の長さについてである。ブラツケに宛てたマルクスの手紙を

見ると、『長さ産みの苦みの後に』共產主義の第一期が始まるとしてあるから、過渡期は『長さ』苦みの時代である筈だ。しかし其の長さが如何ほどのものであるかと云ふ事については、彼は書中に何事も述べてゐない。しかるに先きに述べたレーニンの『農業税の意義』といふ論文を見ると、その中に次のやうな文句がある。

『廣く露西亞に行はれてるやうな先資本家的關係の此の狀態から、社會主義への直接の推移を實現することは、果して可能である？』

然り、それは只一つの條件——これは驚くべき科學的勞働の完成の御蔭で吾々が知つた所のもの——に於てのみ、或る程度まで可能である。その條件が即ち電氣化（露西亞全土に亘る電力供給の大計畫を指す）だ。けれども吾々は此の「一つ」の條件が少くとも數十年に亘る仕事を要求することを善く知つてゐる。さうして吾々が此の期間を短縮し得るのは、英國、獨逸、及び米國といふやうな國々に於て、無産者の革命が勝利を得た場合に限

られる。』

之で見ると、露西亞の過渡期は、今からまだ少くとも向う數十年に亘るものと云ふことが分かる。それなら如何なる國に於ても、所謂過渡期は斯かる長年月を要するものかと云ふに、恐らくさうでは有るまい。同じくレーニンの論文中には『一九一八年には、國際的帝國主義といふ同じ殻から二羽の雛が生れたやうに、社會主義を半分宛別々に産んだ。獨逸と露西亞とは一九一八年に於て、前者は極めて明白に物質的に實體化された、經濟的、産業的、及び社會的の諸條件をば、社會主義のために具へて居り、後者は社會主義の實現のため必要な政治的諸條件を具へてゐた譯である』と言つてある。即ち露西亞は革命により無産者の執權といふ所の、『社會主義の實現のため必要な政治的諸條件』を具へたけれども、その經濟狀態が甚だ幼稚なために、『物質的、經濟的、産業的の意味に於ては、まだ社會主義の玄關にも達してゐない』ので、その過渡期は勢ひ長期に亘らざるを得ぬ

のである。しかし獨逸のやうに、社會主義のために必要な『經濟的、産業的、及び社會的の諸條件』をば已に具へてゐる國では、無産者の執權といふ政治形態さへ其れに加はれば、比較的容易に社會主義に這入ることが出來、從て過渡期は存外に短くて済むべき筈である。

之によつて見ると、一定の社會は、社會主義の實現に必要な政治形態——即ち無産者の執權——を取ることに於て、マルクス主義に謂ふ所の過渡期に這入る。即ち過渡期の要件は、無産者の執權といふ政治形式である。しかし假ひ斯様な政治形式を採つても、その國の經濟狀態が後れてゐては、容易に社會主義を實現することは出來ない。それなら經濟狀態の幼稚な國が急いで過渡期に這入るのは、畢竟無用のことに過ぎないかと云ふに、決してさうでは無い。社會はさういふ政治形式を採ることにより、意識的に社會主義の實現に必要な經濟的、物質的條件の完成を急ぐことが出来る。過渡期に這入ると云ふことによつて、其の社會は意識的に社會主

義を目掛けて進むことになる。社會主義の實現は斯かる社會に於て豫め約束され保證されることになる。マルクス主義者は、——唯物史觀の曲解者が言ふやうに、——社會主義の實現が機械的必然性を以て行はれる、と信じてゐる譯ではない。だから早く過渡期に這入つて其の實現を確保することは、——たとひ其の實現は、經濟狀態が幼稚な國では、數十年先きのことに屬するの外は無いとしても、大に意味あることで無ければならぬ。私は露國の『實驗』によつて、先づ斯様なことどもが考へられる、と思ふものである。